どＳヤンキー少女が
短小痴漢をさらって逆レイプ、
そして玉責め制裁

【ＣＦＮＭ】【金責め】【短小責め】

玉子王子　著

１章　ドＳヤンキー少女に痴漢をしたら金蹴りされた

――あ、この野郎。ケツ触ってやがる。

うさぎ県を中心に走っている私鉄うさぎ電鉄。

その満員電車の中。

麗華は自分の尻を撫でる手に気づく。

金髪である以外は、大人しそうな小柄な少女。

制服で、学生なのはわかるだろう。

いや、何歳だろうが勝手に触っていいわけが無い。

しばらく黙っていると、手が増える。

片手だったのが片手を乳に、元からの手は前に伸ばし始める。

――こっちが大人しい奴と見たか。

つまり、弱い相手には強い手合い。

そういうのには、小柄な麗華は結構迷惑をかけられてきた。

しかし今は違う。

いわゆるレディースのトップで、その辺の男には喧嘩でも負けないつもりだ。

後ろの男は、サラリーマン風だった。

――金髪だからどうかと思ったが、気が弱いのを誤魔化してるだけだな。いくらでも触れるぞ。ああ、柔らかい尻。乳も見た感じよりでかいぞ。うひひ、ムニムニっと。

股間が動く。触って問題なさそうだと、白井の肉根は安心して反り立つ。

大丈夫かわからない緊張状態では立たない繊細なものだった。

気の弱い、と白井が考えた麗華の乳を大胆に揉む。

ブルブルと、音が聞こえそうなほどだ。

それでも、満員電車では中々気づかれない。

――たまんねえ、多少リスク背負ってチ〇ポ出しちまうか。いや、ズボンの上からでもこすってイカせるか。パンツが汚れるが……ん。

麗華の手が、白井の股間に伸びる。

――おいおい、まさかその気になった？　俺のテクで、ん……

「はぐっ」

声が出た。

ゴリ、と音が鳴るほど、男の股間の肉玉を握り潰されていた。

「な、なにを……」

震えながらたずねるが、麗華は無言。

まるで気づいていないような、先ほどからと変わらない不機嫌そうな表情で人ごみ越しに窓の外を見ている。

電車が止まる。

満員なので、大して揺れない。

麗華が握ったまま人ごみを掻き分け始める。

――ま、まて。離されたらキ〇タマが……！

離れれば流石に手を放すとは思う。

ナノテクで潰れた玉ぐらい一日で再生する世の中でもある。

それでも、肉玉を握った相手が離れれば、最優先でついていくのが男というものだった。

顔を引きつらせ、電車を降りる。

周りにまばらな人。

痴漢として、電車を降りれば当然体を触るのはやめる。

一方で、まだ麗華は握り締めたままだ。

歩くのも苦痛で、息が詰まる白井。

そんな状態だが、周囲は誰もそれに気づかない。

白井が触っているならよくある「痴漢」として分類され、人の目にはいるだろう。

だが若い娘がサラリーマンの肉玉を握って放さない状況など誰も想像もしていない。

だから、手がその辺を握っていても何というか重なって見えると思うか、そもそもまるっきり気づかないでスルーするのが関の山だった。

また歩き出す麗華。

立ち止まる白井。

手を放すか、と思った。

が、放さない。

手が伸びきると、チラッと振り返る。

「キ〇タマくれるってこと？」

二人にしか聞こえない小声。

それでも、白井にははっきりと聞こえた。

怒っていいのか、困惑していいのかわからず、表情自体は中途半端だった白井。

だが今の瞬間、血の気が引いて引きつる。

恐怖の顔に変わった。

――なんなんだ、このガキは……

思いつつも、ついていくしかない。

文字通りキ〇タマを握られたのだ、相手が放さないならついていく以外にない。

いく先は、女子トイレだった。

「こ、こんな所に……んぐうう」

「痴漢のキ〇タマ潰したってみんなに自慢しちゃおうか？　私レディースやってんだ。みんなそういう話喜ぶぞ」

「は、入る入る。緩めてくれ頼む！」

「あは、そんな大きい声出さないでよ。大丈夫、この駅にはいくつか女子トイレがあってね、こっちは古いし、人の流れから離れてるからまず誰も来ないよ」

事実、中には誰もいなかった。

個室に連れ込まれる白井。

普段なら喜ばしくさえ思える状況だが、痴漢をした娘に肉玉を握られて引き込まれるのではとても喜べない。

「さっそくだけど、おっさん、私の体触ったよね？」

ドサクサだが、レディースだということはちゃんと聞こえていた。

そういう手合いに、そういうことを認めたらどういう事になるか白井には想像も出来ない。

とにかく、誤魔化すしかないと思う。

「ぐ、偶然……」

「そういうこと言ったら、どうなると思う？」

「……はぐおおっ！」

「男の命が大変！　あははは！　キ〇タマ握られたら観念しなよ！」

笑ってから、手を緩める。

大きく息をつく白井。汗がすでに滝のように出ている。

繰り返される肉玉への強圧は徐々にダメージを蓄積していっていた。

その現況を睨み見下ろす。

「く、この……」

「ん？　折角緩めてあげたのに」

「いや……」

目をそらす。

まだ握られたままだ。

仮に首を絞めて殺そうと考えたとしても、間に合うかギリギリだ。

そして間に合っても殺人犯になってしまう。

破滅以外の何者でもない。

「改めて聞くけど、痴漢だよね？」

「そ、そうだ。頼む、見逃してくれ」

「いいよ、私だってレディースさ、警察とは相性が悪い。黙ってる」

「そ、そう？」

金で済むのか。

ほっとする反面、たかが痴漢でと思わないでもない。

――触っても減るもんじゃなし、楽しんでりゃお互い幸せだってのに。人の幸せを邪魔する奴はしょうがねえな。

意味不明の論理を展開しつつ、いくら出せるか頭の別の所で算段する。

と、麗華が手を振る。

「先にいっとくけど、金は要らないよ」

「え？　それじゃこのまま見逃して？」

「馬鹿、そんなわけないだろ。私の要求は……」

撫でる。

握っていた股間を。

「うふふ、要求はね」

――ま、まさかのエロ展開？　やっぱり俺のテクで催してたのか？

期待に股間が膨らみかける。

その一瞬前、手が離れる。

変わりに膝が跳ね上がった。

グニ、乳房でも揉み上げるように、股間の肉が持ち上げられる。

膝の骨に肉玉を押しつぶされながら。

ゴリゴリゴリ、肉玉の悲鳴。

目を見開き、瞬時に血の気が引く白井。

「おごおああおあああああっ！　キ〇タマがっ！」

激痛に声で便所を満たす。誰かに聞かれるかも、と考える余裕などなかった。

それとは対照的に、心底楽しそうな麗華。

「あはははは！　「キ〇タマがっ」てっ！　今、「キ〇タマがっ」て！　マジかよ！　そのまんまじゃん！」

股間を押さえて腰を引き、水洗トイレの水ために尻をぶつけ、腰を引くに引けない白井。

その下がった頭を指差すようにして笑う麗華。

ブルブルと、中々のボリュームの肉風船が揺れる。それに、目を取られることもなく顔を見上げる白井。

「な、何を……なにが狙いだ」

――こ、これはエロ展開じゃねえ。これからやる相手のキ〇タマ蹴る意味ねえ。じゃあ、一体なんだ？

聞かれた麗華が恥ずかしそうに顔を赤らめる。

「んー、私実はね。えへへ、恥ずかしいんだけど……」

頬を両手で抑える。

「ちょっとだけ、Ｓっぽいんだ」

「なんだそれ……」

「だから、どちらかといえば、ＳＭの、Ｓ寄りなんだ。といっても、ちょっとだけだけどね」

ちょっとだけ。

蹴り上げられた股間を押さえながら、どうもそれを額面どおりには聞けない白井。

「そ、その、具体的には？」

「具体的には、……「彼氏にキ〇タマ蹴らせて、そしてその後にすぐおチ〇チン入れて」って頼んで何人にも振られてるぐらいかな」

――キ〇タマ蹴ってから、その蹴られた男に挿入してほしい？　異常者じゃねえか……

「ちょっと、Ｓっぽいでしょ？」

「ちょ、ちょっとじゃねえよ」

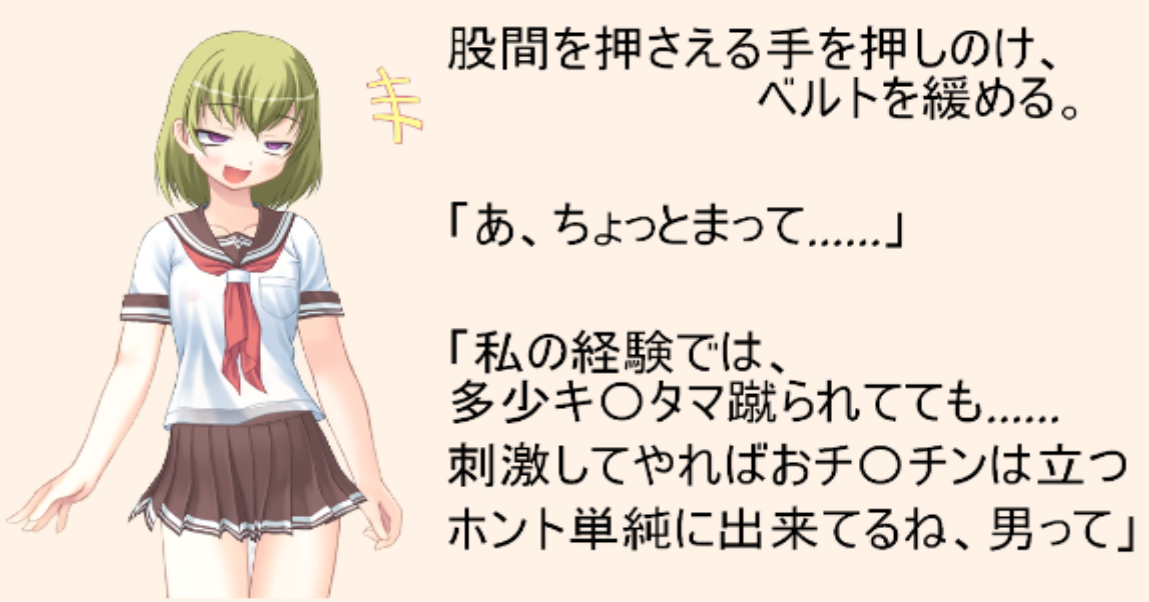
「そうかな？　腕切り落としたりするのが凄いＳでしょ？」

ごく当たり前の話のようにフラットな視線を向けてくる麗華。

唾を飲む白井。
確かに、彼女が言っていることは本当の話だ。
だが、どうもここで出すのはニュアンスが違う気がする。
「そういうガンギマリの人たちと比べるなよ」
「まあ腕もナノテクで治るけどね」
「だから？」
昆虫でも見るような目を向けられ、流石に麗華も目をそらす。
「ま、まあ、とにかく、私の要求は簡単。エッチして、ってこと」
本来なら飛び上がって喜ぶ条件だ。
だが彼女が言っている「エッチ」とやらの手順は普通では考えられない。

まず肉玉を蹴られる。
そして本番。

なぜその二つが繋がるのか、白井にはまるで理解不能だった。
――やべえよ、やべえよ……
逃げるしかない。
が、すでに一発強烈なのを股間に喰らっている。
走って逃げようにも、太股が与える震動に股間が耐えられるか。
「その、今蹴られたから立ちそうにない。それに、彼氏に悪いし」
「今フリーだから大丈夫」
「俺の心配は？」
「任せてよ」
手を伸ばす。
股間を押さえる手を押しのけ、ベルトを緩める。



「あ、ちょっとまって……」

「私の経験では、多少キ〇タマ蹴られてても……刺激してやればおチ〇チンは立つ！　ホント単純に出来てるね、男って」

――ちょっとまて、経験ってお前……

似たようなことを何度もやっているのだろうか。

いわゆる逆レイプという奴なのか。

ズボンが下ろされ、ついでパンツが引っ張られる。

モノが立っていたら引き下げると危ないという、経験値の高い女であることを示す気遣い。

肉玉を蹴られた直後で普通なら立つわけがない相手にでも、それが発動されるほど若くして経験豊富というわけだろう。

――ふ、普通にやるなら誰でもマジ大歓迎の相手なのに。かわいいしオッパイもでかいし。

しかし、金蹴りの後となると大歓迎の割合は一挙に1%以下に激減するだろう。

「ほんじゃ、**金蹴りセックス**開始っと」

「何だよその謎の競技は……」

膝を突いて体を曲げ白井の股間の位置に頭の高さをあわせる麗華。

パンツが下げられ、隠す手が押しのけられる。金蹴りの後で、力がない。

白井の股間があらわになる。

「……あは」

麗華が、輝くような笑顔で上目遣いをする。

白井のモノは控えめに言ってもかなり小さいほうだった。

金蹴りを食らって縮んでいるが、小さいのはそのせいというには小さすぎる。

経験豊富な麗華は、見ればそれがどのぐらいのランクのモノかわかるだろう。

――パンツをズリ下ろさない、経験豊富なお前だ……わかってるよな？

男には絶対に言ってはいけない言葉があることが。

経験豊富なら、分かっていないはずがない。

その期待の目に気づいたのか、うなづく麗華。

そして口を開く。

「気にすんなよ。こんな小指みたいなチ〇チンの奴だって、多分ざらにいるって。見たこと無いけど」

「……」

「っていうかこんなドリルチ〇ポいるんだ！　あと、マジでちいせえ！」

ある意味一度目より強烈な金的を食らう。

それに等しい衝撃で、何とか弛み始めた肉玉が再び引きあがる。

「あ、キンちゃんが！　やべえ、つい言っちまった、本当のことを！　嘘嘘、小さくないって！　小〇生の真ん中ぐらいの大きさはあるって！　大体、七センチあればやれるんだよ、な？　あんただって童貞じゃないだろ？」

「結婚してる」

「結婚できるんだ！？　このチ〇ポで！　じゃあエリートサラリーマンなんだ！」

目を輝かせる。

「これで我慢して、奥さんが結婚してくれるんだからさ！」

――こいつ殺してえ。

「公務員で……」

「公務員が痴漢！？　馬鹿すぎるわ！」

――こいつ一々えげつないな……。

今一言はまったく正論だったが、だからこそ堪える。

「公務員なら納得だよ！　なるほど、あんた要するにチ〇チン小さいから公務員目指したんだな」

「誰もそんなこと言ってないだろ」

「短小の俺でも公務員になれば結婚できる！　ってラノベありそうじゃない？」

「ねーよ」

「私も結婚するなら公務員だな」

そういわれて、大学の同期とやった合コンではモテモテだったことを思い出す白井。

思わず頬が弛む。

「もてるんだよ、公務員は。今公務員になれる奴は、優秀だし！」

「そうだよな。それじゃ、私ともエッチしてよ」

「それじゃ、ってよく分からんが……金蹴り抜きなら」

「それはエッチって言わないから」

「それが普通のセックスなんだからな！？　彼氏とも普段はそれだろ？」

「普段というか、はじめは我慢してそうして、親しくなったら金蹴りセックスに移行しようとして、今まではずっと失敗してる感じだな」

「諦めて自分を変えろ」

「っていうかキ〇タマは普通の大きさだな。なのになんでおチ〇チンそうなの？」

指でブニブニとつつく。

舌打ちせんばかりの白井。

「それは俺が聞きたいんだよ」

「やっぱり悩んでるんだ。短小だもんな。しかもドリルチ〇コ。私なら自殺するかもしれない」

「痴漢相手だと思って好き勝手だな……」

「ん？　彼氏にでもこんなもんだよ。だから小さい人だとすぐ別れちゃうんだ」

「本当に自分を変えるべき人間だな」

「まあ小さいのは笑えるけど、小さいのが悪いとは思ってないよ」

「ほんとかよ？」

というか、悪く思っていなくとも小さい一物を笑うだけで**人間関係が終わりかねない**ことをこの経験豊富らしい娘はまだわかっていないのか。

「まあなんでもいいや。そろそろ帰らせてもらおうか」

「そうか。まあそんなに嫌がるんなら仕方ないな」

立ち上がる。

　そして、膝金蹴り。

「おごおおおおっ！」

「痴漢見逃す交換条件なんだから、帰すわけないだろ？　キ〇タマ蹴るぞ？　って、もう蹴ってたな。はははは！」

　膝はまだ丸出しの肉玉に減り込んだままだ。グリグリと、持ち上げて磨り潰す。

「ぬんぐううう」

　――さ、さっきより強烈……死ぬ、玉潰れて死ぬっ。目が回ってきやがった。立つわけねえ、こんなキ〇タマやられて、立つわけねえ……つ、潰れる。玉が潰れるっ。

「うーん、金蹴りはやっぱ興奮するわあ！　おマ〇コ濡れてきたよ！　きゃは、言っちゃった！　はずかしー！　でも濡れてるんだもん！」

　スカートの上から、まだ毛もさほど茂っていない秘密の花園を撫でる。

　じっとりと蜜が滲んできていた。

　先ほどの金蹴りも興奮したが、今のは「これからハメるぞ」という**決意の金蹴り**だったので、興奮もひとしおだった。

「あぬふおおおぐ」

　うめき、股間を押さえて悶える白井。

　その姿を見て、さらに花園が熱と湿気に覆われるのを感じる麗華。

　――ああっ、いいわ。私が男なら、もうおチ〇チンビンビンですぐぶち込めるわね。っていうか、私のほうもぶち込めるぐらいだけど。本当に金蹴りって興奮する！　キ〇タマがグニャっとひしゃげる感じとか、頑丈な男が華奢な女の一発でへたれる姿とか、いろいろ勘案してとにかくいい！

　思いつつ、ふと見ると白井の目元に涙が浮かんでいるのに気づく。

　さらに興奮する麗華。

「あは、泣いてんじゃん！　我慢しろよ女の子の攻撃ぐらい。おチ〇チンついてんだからさ」

　グニ、と縮み上がった一物を摘まむ。

「おっほおお！　ちっちゃーい！　小指さんこんにちわ！　今からビンビンのフランクフルトにしてあげるね」

「は、ぐぬ、うう」

「何言いたいのかわかんねー。チ〇ポ小さいからフランクフルトにならないって？」

　――こいつチ〇ポ立たせる気あるの？

　所詮女には男の気持ちはわからないということか。

　しゃがみ、両手を肉棒というのは気が引ける肉小指に向ける。

　皮を摘まみ、広げる。

　ムワ、と毒ガスが広がる。

　思わず顔を背ける麗華。

「うおっ、臭！　いくら包茎だからって、既婚者といしてこの恥垢はまずいっしょ！？　ってかせめて包茎は手術でしょ普通。日本人の七割が包茎って絶対嘘だからねあれ」

「な、何でわかるんだよ」

「だって、剥けてる状態の名前ある？」

「む、剥けチン？」

「ほらあ、包茎は包茎だけど、剥けてたら名前ないでしょ？　ってことは、そっちが普通ってことよ。赤いドラ〇もんっていうことはあっても、青いドラ〇もんって言わないでしょ？　だってドラ〇もんは青いのが普通なんだから。同じように日本人のおチ〇チンも剥けてるのが普通だからそっちに名前はないの」

「ちょっと何言ってるかわからない」

「あん？」

「七割が包茎、これがファクト」

　チラッと白井の顔を見る麗華。

　その顔があまりにも真剣かつごく普通なので、何を言っても無駄だと理解する。

　――そりゃそうよね。短小ドリルチ〇ポとしては、せめて包茎ぐらい普通のことだと思わないと男としてチ〇ポぶら下げてられないわ。

　頷き、話題を変える。

「それより、洗わないとかまずくない？」

「洗ってるよ。前に洗ってもう一ヶ月だ」

「最悪だなこいつ」

　鳥肌が立つ。

　だが、同時にチャンスと思う。

　スカートに手をやる。

　グリグリと、服越しに女の豆を押しつぶす。

　――クッソ汚いこの汚チ〇ポ舐めてやれば、衝撃と感動でインポでもビンビンっしょ。

　舌を突き出す。

　――今の私なら、このぐらい舐められる。舐めれば、もうさっさと本番やっちゃおう。欲しくてしかたないし。

「おっさん、名前なんだっけ？　カバンとか調べりゃ、わかるんだぞ？」

「し、白井」

「そう。じゃあ信じるけど、白井さん」

　皮を広げる。

「あんたのおチ〇チン欲しいから、恥垢まみれのこいつ、舐めさせてもらうよ」

「えっ、あっ、あふっ」

　舌。

　敏感な皮の内側を削りながら、麗華の舌が白井の小ぶりな先端部に触れる。

　――うりうり、先っぽを押して押して。

　萎えた物にいきなり強い刺激を与えても無駄だと知っている経験豊富な麗華。

「うわ、そ、そかはき、汚い……」

　――わかってんなら洗えよドリルチ〇ポをよお。

　思いつつ、皮を摘まんで広げたまま、舌を出し入れする。

　皮も敏感なのは皮オナニーに耽溺して皮を伸ばしてしまうという悲劇を生む人間が多いことからも明らかだ。

　しかも、皮は膨らんだり萎んだりはしない、いつでも十分刺激を受け止める。

先ほど違って快楽で腰を引くが、やはり下がれない。

しばらくすると、二度の金蹴りで萎んでいた一物が復活し始める。

――お、来た来た。

「へへ、結構大きいじゃん」

――私も大人の女になったわー。

一週間ほど前に可愛いからと童貞を頂いた小〇生の一物より小さいのを見ながら、少しうっとりしたような表情を作ってみせる麗華。

「これなら、下の上はいくんじゃねえの？」

リアリティーのある褒め言葉は中々難しいものだ。

が、上手くいったつもりである。

と、白井が少し表情を曇らせる。

「下の上か……やっぱり男心がわかってないな君は」

――いや、本当は下の下なんだからな？

思いつつも、立ったならそれで十分だ。

彼女が呼ぶ謎の競技、「金蹴りセックス」の開始である。

体験版終わり

楽しんでいただけましたか？

次の章から逆レイプ開始です。　よろしければ製品版で続きをどうぞ。